
夕風の一葉

星野すばる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕風の一葉

【Nコード】

N0290T

【作者名】

星野すばる

【あらすじ】

私の国、香楽神聖王国は水城国王月代によって滅ぼされた。あれから14年……生涯2度目の戦いが始まる。【古代日本風異世界FT】

つぎしろ
月代王、崩御。

香樂離宮かわらにいる私の元にその報せが届いたのは、ちょうど幼い息子
を寝かしつけたときだった。

「月代が……殺された、と？」

早馬にて駆けつけたらしい伝令に、平たい声で返す。

「は、本日未明、陣中にて……」

「誰が殺した？」

繰り返そうとする声にかぶせて、ただす。

「そばには石鹿いしかが控えていよ。誰が近づけたのや？」

「敵の放った間者かと」

「ならば、なぜここに石鹿がおるのや？」

私の言葉で、その男が振り返る。それが最期だった。

「せい！」

掛け声とともに、石鹿が剣を振り下ろす。月代を殺した男は、今
度は自分が殺された。

「そう、ほんまに殺されたの……」

「ほんの一瞬の隙をつかれた。遠子とむこは知っていたか？ 王は、この
ごろ目の病が進んで、起きぬけなどは見えていないことが多かった
のに……俺の落ち度だ」

目の前で殺された。守りきれなかった。あと一步のところで、止
められなかった……。

石鹿が額を押さえながら呻く。己を呪うような、ただ己だけを責
めるような声は、聞いているだけでせつなくなる。

もう、やめればいいのに。どうせ、いくら悔やんでも、悔やみ切
れないのだから。二人の絆は、子供のころから積み上げたもの。そ
の深さを思いやれば、片翼をもがれたに等しかろう。

「それで、ほんまのところ、敵とはだれぞ？」

みまきのみや

「水城宮に残る、古狸どもだ」

やはり……。

私は小さくため息をついた。

「月代は生き急ぎすぎたのや」

寡黙で冷徹な若き王の所業は、古参の側近たちに疎まれていた。

性急で、ただ一度の失敗さえも許さぬほど厳しくて……いつか、誰かが、暴挙に及ぶ可能性は十分あった。

「もう少し周りを見るゆとりがあればの。何度言うても聞かんから、こんなことになるのや」

「冷たいんだな」

后なのに、と、石鹿が非難するようにつぶやく。それがあまりにも恨めしそうだったので、つい、私も一言言いたくなってしまうた。

「そうや、私は月代の后や。同時に、あの人に滅ぼされた香樂の女王でもある」

「まだ恨んでいるのか？」

あきれた。真に受けるなんて。これだから、男というものは……。おかしくてしかたない。

「そうやね、恨んでてもおかしいわ」

「遠子！ 王は何よりもお前が欲しかった。香樂という国ではなく、お前こそが――」

「でも、あの人は私からすべてを奪った。私が欲しかったんなら、そう言えばよかったのや。国が残るなら、私はあの人に従うとった」
「それができれば、そうしていた」

石鹿が言葉を濁す。ほら、ごらん。どんなに言葉を尽くしても、所詮それは上辺を飾るだけのこと。

石鹿の言葉も嘘ではあるまい。ただ、それも、あの人を動かした理由の一つにすぎない。結局、月代は香樂も欲しかったのだ。

「私がなんでこの子を産んだと思う？」

幼い息子を指差す。

「これは香樂と水城の血を継ぐ子。香樂の血は、私を介してこの水城と合わさった。国としての形はのうなっても、香樂は水城の中で生き続けるのや」

石鹿が不思議そうに私を見ている。無理もない。男にこの理屈は理解できないだろう。彼らは目に見える形でしか、己の存在した証を遺せない。

「だから、私はこの血を護るよ」

正しく伝わらないのなら、それでもいい。今はただ、私の本心を分かってももらえれば十分だ。

「謀反者の好きにさせて何とする。ここに、月代の定めた世継ぎがおるやないか。一樹いつきを立て、水城宮へ戻るのや。はよ、支度しや」

「遠子……」

私の言葉に、石鹿が安堵の息をつく。それから頭を下げ、部屋を出ていった。その後ろ姿を見送りながら、私は後戻りできぬ位置に立ったことを、しっかりと自分に言い聞かせる。

そう、進むしかない。この血と、月代の生きた証を護るには。

「月代……」

厳しい横顔が脳裏に浮かぶ。ふいに体の奥から熱いものが込み上げてきて、私はその場に膝をついた。

「産んどいてよかった」

月代には、一樹の他に血を継ぐ者がいない。他に女を持たなかったからだ。周りがどんなに勧めても、私以外の女を近づけなかった。

私がおか言ったわけではない。彼が、自分からそうしていた。石鹿に言われるまでもない。このことだけで、彼の心は十分汲み取れる。

「月代……」

私はようやく彼のために泣いた。

十四年前、私の統治していた国、香樂神聖王国は滅んだ。水城国王月代は、そうすることで中原の主となった。

神聖女王の力が中原のすみずみまで行き渡り、緩やかに連合を形成していたのは、遠い昔のことだ。輝ける時代を記憶する者も、すでない。それでも、名目上はまだ中原の主だった。

目を閉じれば、あの日の光景がよみがえる。

水城の大軍が香樂宮を取り囲んでいる。その数は約一万と、報告された。対する我が国は、女子供にも武器を持たせて、やっと二千。初めから、兵力の差ははっきりしていた。我が国は元々守りの兵しか持っていない。香樂は精神的な支柱、抛り所であって、実質的な力を持つことは敬遠された。攻めの兵が必要なときは、連合内の諸国から借り受けていた。

その頼みの国々も、そのころにはほとんどが水城の属領と化していた。かろうじて自治を許された国も、見て見ぬふりだ。我が国を援けては、水城ににらまれるものだから。

私たちには、何の策も望みもなかった。城にこもり、水城が兵を引き揚げてくれるよう、ただむなしく祈るより他は。

月代は、ただ待つだけの戦に、どんな思いで臨んでいたのだろう。七日のち、宮の門は内側から開かれた。疲れ果て、祈る力も失せた自らの民によって、香樂は息の根を止められた。

「まもなく王が入城されます。女王遠子さまにはくれぐれも早まったまねをなされませんよう、お願い申し上げます。お身内の方々もしかり。王は皆様に寛大な処遇を約束されております。心安らかにおいでをお待ちくださいますよう、重ねてお願い申し上げます」

先に遣わされてきた月代の名代が、口調だけは丁寧に諭す。その言葉を、私は何の期待もせずに聞いていた。

水城国の「寛大な処遇」とやは、風のうわさで知っている。国主は処刑、近親の男子も、年齢を問わず皆首を刎ねる。若く美しい女、とりわけ身分の高い者は王の閨へ、他は戦利品として功労者や

廷臣に下げ渡す。

例にもれず、私たちもそのように扱われるだろう。私の後ろに控える父や三人の姉も、同じことを考えていたらしい。

「遠子……遠子さま」

一番上の姉が口を開く。重い静寂の中、その声は頼りなく響いた。「あなたは幼い日を水城で過ごさはった。月代王とも、面識あらはるんと違いますやろか？」

たったそれだけの言葉で、私は姉の言いたいことを悟ってしまった。だからといって、彼女を責められるだろうか。私も、望みがあるならすがっていただろう。

月代のことは、勿論、知っている。私は十代の半ばまで水城にいて、彼と共に育った。

かたや、落日の王国から来た人質の王女^{ひめ}。

かたや、確かな後ろ盾をもたぬ王子^{みこ}。

いつ、何があってもおかしくない状況の中で、共に頼るべき者のない身の上同士、助け合って生きていた。

ことに、月代は生まれつき目に病を持ち、不自由だったせい、内向きですぐに己が殻に閉じこもる。私が彼の目となり、支えていたのだ。香樂へ戻ることになったあの日まで、ずっと。

『遠子、どうして帰るのか？』

『女王が亡くなられた。私が跡を継ぐんやて』

『なぜ、遠子が？』

『私も聞きたいわ。姉さまがおるのに』

香樂は女王の治める国。不変なのはそれだけだ。継ぐのも、血筋であれば、上下の順は関係ない。だけど、これまでは初子が継いできた。女王もそのつもりだったから、末子の私を水城へ預けたはずだ。

私は、当時の水城王の強い推しにより、女王となった。王は、私の年若なのを理由に、何かと口を出してきた。

今なら分かる。王は初めからそのつもりだったのだ。水城で育て

た王女を立て、後見として香樂を援ける。その実は、香樂を意のままにし、中原に影響力を及ぼさんがため。

『遠子、帰るのは、うれしいか？』

そうたずねる月代の顔は、のっぺらだった。元々感情に乏しいが、そのときは本当に何にもなくて、それがなんとも哀れで、痛ましかった。

『月代、強うなりや。あなたも私も、さだめに従うて生きていくしかないのやから。強うなって、生き抜くんや、何があっても』

私の言葉に、月代は一度だけ、しっかりとうなずいた。

あれから七年がたつ。月代は私との約束を守って、生き抜いた。兄弟が次々と斃れていく中で、彼だけが生き延びて、王位についた。そして、私が治めるこの国に、兵を送り込んできた。

月代がもし恩義を重んじるならば、確かにあのころの思い出を語り、情に訴えることもできるだろう。ただ、彼にそんなものがひとかけらでもあったなら、そもそもこんな企てをするだろうか。

彼はもう私の知る月代ではない。どう訴えればいいだろう。どう頼めば、彼は耳を貸してくれるだろう。

分からなかった。それでも……。

「やるだけのことはやってみましょう、姉さまがた」
他に、なんと答えられたろう。

鐘や太鼓が勇ましく鳴り響く。それは少しずつ宮へ近づき、それと共に、兵士たちの勝利にわく声も騒々しさを増す。

それらすべて、ふいにやんだ。かわって、硬い足音が近づいてくる。

姉たちが息を殺し、身を寄せ合っている。父はさすがに姿勢を正し、威厳を保っているようだ。

薄い紗の向こうに、人影が立つ。すべての足音がやみ、一瞬、辺りが静まりかえる。

我知らず、息を詰めた。

紗が引かれ、先頭の男が一步踏み込む。石鹿だ。月代の乳兄で、幼いころ、私たちの唯一の味方だった男。

石鹿は部屋の中を見回し、罨がないのを確認すると、脇へ退いた。軽く頭を下げ、主を待つ。

月代が現れた。まっすぐにこちらを見据え、ゆっくりと近づいてくる。

あいかわらず、肉の乏しい体だ。背ばかり伸びて、横へは広がらなかったらしい。ちゃんと鍛えないからだ。あれほど言ったのに。でも、貧相な感じはしない。背筋を伸ばし、胸を張り、うつむかずにまっすぐ前を見て……堂々としていれば、体格など関係ない。十分周りを威圧する。

数歩の間合いを残して、彼が立ち止まった。

少年期を脱した顔は、私の知らない男のものだ。ただ、感情の乏しい、のっぺらな面は、別れたあの日と同じもの。それだけが、私の記憶にある少年のままだった。

彼の目が、じっと私を見据えている。私も、まっすぐに見返した。あのころは、それでお互いの考えが手に取るように分かった。そのとき、その感覚を取り戻したような気になったのは、私の思い過ぎだったのだろうか。

月代の目は何も語らず、ただ、私を見ているだけだった。

「香楽神聖女王遠子さま、ならびに、ご一族の皆様におかれましては、つつがなくお過ごしのようにて、まずはお慶び申し上げます」

月代の一步後ろに立つ男が、主の代わりに口上を述べる。

何がつつがなく、か。父が吐き捨てるようにつぶやいた。

男が口上を続ける。

「皆様の今後につきましては、のちほど詳しくご説明させていただきます。別室にお下がりいただいて、お待ちくださいますよう」

「今、聞かせてもらえますやろか。私どもも覚悟はできとります。

待つのは飽いてしまうた」

「ご安心を。お下がりいただくのはお身内の方々だけです。遠子さ

まにはお残りいただいて、月代王より直接お言葉を差し上げます」男が手を挙げる。それを合図に、兵士たちが私の家族を取り巻いた。

姉たちが細い悲鳴を上げる。

「――石鹿」

私はおもわず見知った顔に呼びかけた。

「父と姉さま方を頼みます」

石鹿が途方に暮れ、月代と私を交互に見つめている。口上役の男が不快もあらわに私を見た。

「勝手なお言葉はご遠慮願います。我がほうは勝ち戦にて、本来ならば、このようにへりくだる必要などないのですぞ。香樂は元宗主ゆえ――」

「よい」

月代が彼を制した。それから顔を石鹿に向け、うなづく。石鹿が軽く頭を下げ、前に出た。

「王のご命令により、お身内の方々は私が責任をもってお護りいたします。ご安心くださいますよう」

「かたじけのう」

私は心から安堵した。

父と姉たちが部屋を出る。その場には私と、五人の家臣だけが残された。

月代が私に向き直り、口を開いた。

「香樂宮は直轄として府を置き、西の要とする。しばらくは我自らが治め、のちに役職を配す。遠子女王には、このままこの宮に留まることを許す。ただし、我が水城宮へ戻るときは、我に従うように」――私は、殺されるのと違いますのか？

「汝は我の后にする」

驚いた。首を刎ねられるものと、覚悟していたのに……。

月代はあの日々を覚えてくれていた。それなら期待できる。きっと、父や姉にも慈悲を与えてくれるだろう。

だけど、それもやはり、私一人の思い込みだった。

わかさのおう
「若狭王、ならびに三人の王女^{ひめ}は、明日首を刎ねる。残る家臣についても、同じ処置とする」

「待ってください！」

絶句した私に代わり、家臣が口を開く。

「私ども、臣は覚悟しとります。若狭さまも同じでありましょう。

せやけど、姫さま方は！ お国の習いでは、国主の身内であっても、おなご女子までは……」

「香樂は他と違う」

月代の声が冷たく響いた。

その処遇を聞いて、姉たちは自失してしまったそうだ。あまりの
話に、泣き叫ぶことすらできなかったのだろう。

無理もない。姉たちはずっと宮の奥深くで、外の世界を知らずに育った。香樂を取り巻く情勢とは無縁に、美しいものだけを見て、楽しいことだけを考えて、のんびりと暮らしていた。水城が攻めてくると伝えても、それがどういうことか、本当のところは分かっていた。

ある意味、それは幸いだったのかもしれない。

父も石鹿に頼んでいたそうだ。我に返る前に殺してやってほしい、と。それを石鹿が月代に伝え、聞き入れられた。

翌日、姉たちが真っ先に前へ出され、三人同時に首を刎ねられた。誰も悲鳴を上げなかった。取り乱す姿を見ずにすんだのは、残される私にとっても救いだった。

家臣、父と、順に刑は続けられ、一刻とたたぬ間に、私はすべてを失った。

夜半をすぎたころ、月代は帰ってきた。

はじめ、その骸は広間に置いた。一段高い台に乗せると、側仕えの者や兵士たちがその周りを取り囲み、膝をついた。部屋に、忍び泣く声が満ちる。

石鹿が私を促した。心得て、私は月代の傍らに立つ。

「皆、泣くのはこれまでや」

私の声が聞こえると、皆、一斉に顔を上げた。

「王は、水城宮に残る輩の企てにより、道半ばで果てられた。王の無念がいかにかりか、ここまでつき従うてきた者なら、よう分かっ
ておろう」

皆、真剣に私の話を聞いている。どの顔にも謀反者への怒りと憎しみが表れている。

「夜が明けたら、我らは水城宮へ攻め上る。謀反者どもを狩り、王の仇を討とうぞ」

「オー！」

「一樹王子を位へつけ、王の無念を晴らそうぞ」

「オオーっ！」

雄叫びが広間を揺るがす。皆、拳を振り上げ、口々に威勢の良い言葉を吐く。石鹿が満足そうに皆を見渡し、最後に私を見て、うなずいた。

宮全体が騒々しい。どこもかしこも、支度に追われる兵士たちであふれている。殺気立ち、興奮した声が、いっそ耳障り。戦場というのは、いつもこういうのだろうか。

石鹿は眠れと言ったが、これでは眠れるわけがない。幸い、一樹はよく眠っている。これだけの騒ぎの中で、よくもまあ、身じろぎもせず……末頼もしいことだ。

私はその場を侍女に任せて、月代の眠る部屋へ向かった。

彼の骸はすでに広間から下げ、寝間に移してある。ここは、彼がこの宮に滞在するときに使っていた部屋だ。

飾り気も何もない部屋の奥、紗幕の陰で、月代は静かに眠ってい

る。私はその傍らに腰を下ろし、色のない、のっぺらな顔を見つめた。

生きているときと変わらず、何も語ってくれないその面……。私は、むしろそのことに感謝した。もし、この面に無念だとか、憎しみだとか、何か人間らしい心を読み取ってしまえば、おそらく平静でいらなかった。

彼が唯一心を読ませてくれたのは、私を初めて抱いた、あの夜だけ。彼は心の底から安堵したように、満ち足りた目で私を見つめていた。細い指で何度も何度も私の髪を梳き、肌を撫でていた。

私の自惚れでなければ、あのとき、彼は本当に私を求めてくれていた。何よりも私が欲しかったと、その目は語っていた。

『遠子……』

閨の中でだけ、彼は私を名前で呼ぶ。耳元で、吐息だけで、繰り返しささやく。その熱さだけが、彼も血の通った人間であることを思い出させてくれたのに……。

もう、それすら感じることはできないの？

ふいに込み上げた衝動のままに、私は彼に寄り添った。

かすかに血のにおいがする。すべて、きれいに拭い取られたはずなのに。

それとも、これが死者のにおいだろうか。幸いというのもおかしいが、これまで何人もの死を見てきたが、その骸をこれほど身近に置いたことはなかった。

その顔に、手を伸ばす。額に触れ、頬を撫でる。冷たく、硬い肌。髪だけがサラサラと指の間をすべる。

指で首筋をたどり、胸の上に掌を広げて乗せる。衣を通して、その冷たさがじわりと伝わってくる。

生の証は、どこにもなかった。

部屋に戻った。

「お方さま、どうなさったのです？」

私の乱れた姿を見て、侍女が不審な声を出す。私は何も答えず、身振りで彼女に出て行くよう促した。

一樹はかわらず健康的な寝息を立てている。その温かい頬に触れ、私は安堵の息をついた。

「遠子、何かあったのか？」

石鹿が血相変えて飛び込んでくる。侍女が、彼に何か告げたのだろう。

「何もあらへんよ」

その顔を見て、私はほほえんだ。嘘をつけ、と石鹿の目が訴えている。

「ほんまに、なにもないよ。ただ、死臭が酷うて……体を洗ってきただけや」

「王のそばにいたのか？」

「そうや」

「どうして？」

「后が王のそばに侍るのに、理由がいるの？」

「遠子……？」

石鹿が疑わしげに私を見る。だけど、どうしてそれ以上詳しく聞かせる必要があるだろう。

「そろそろ夜が明ける。石鹿、はよ、月代の支度したり」

「支度？ なんの」

「ここへ置いていく気か？」

問い返してやると、石鹿が「あ」と声を上げる。やっと話を飲み込めたらしい。

石鹿の後ろ姿を見送って、私はため息をついた。あの人を見れば、私が何をしたか分かるだろう。

石鹿は、私が狂ったと思うだろうか。

もうすぐ夜が明ける。長い一夜が終わる。

結局、石鹿は何も言わなかった。

「一樹、ようお聞き」

箱に収められた月代の骸を、幼い息子に見せる。

「父さまはもう目を覚まさへん。起きて、あなたを抱き上げてくれることもない。どうしてか、分かる？」

「分かりません」

「父さまは死ななはった。ほら、触ってみ。冷とうて、硬いやろ」

一樹の手を取って、月代の体に触れさせる。一樹ははじめ不思議そうに首をかしげ、ペタペタと彼を触っていた。その動きが止まる。私を振り返った一樹は、キュ、と唇をかみ、瞳を震わせていた。理解できたようだ。そして、この場で声を上げて泣いてはいけないことも、幼いなりに察したらしい。必死にこらえる様がいじらしくて、私は息子をしっかりと抱きしめた。

この息子とともに、私はこれから戦場に立つ。生涯二度目の戦いが始まるのだ。今度は負けるものか。守ってみせる。香楽の血と、月代の生きた証。水城の歴史に、その名を輝かしく留めるために。最後にもう一度、私は顔を上げ、月代を見た。

「私も、あなたと同じや」

水城だから、ではない。月代の生きた国だから、月代につながるものだから、守りたい。取り戻したい。

「愛してたのよ、ほんまはね」

ようやく、私はその言葉を口にできた。

石鹿が月代の愛馬をひいてきた。ためらうことなく、私は息子と共にその鞍にまたがった。

宮の方角をまっすぐに見据える。手を挙げ、大きく息を吸う。

「出立！」

その日、我々は水城宮へ向け、進軍を開始した。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0290t/>

夕風の一葉

2011年6月2日19時55分発行